

2025

7

令和7年7月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻383号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# とまごあひ



設立1971年



公益財団法人  
さわやか福祉財団

さわやか福祉財団

お申し込み締め切り

7/18(金)

2025年度

# 全国交流フォーラム開催

ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりに向けて

当財団の「新しいふれあい社会づくり」をご支援いただいている皆さまと一堂に会し、幅広い情報交換と交流を目的とした今年度の全国交流フォーラムを開催いたします。

## 2025年7月28日(月)

### 概要

第1部 さわやかフォーラム 13:00~15:40

◆トークセッション

「『楽しい』が結果介護予防に！」

◆パネルディスカッション

「ふれあい助け合いを広げるためのネットワークをつくろう」

第2部 さわやか交流会 16:00~17:30

### 場所

第1部：KFC Hall 第2部：第一ホテル両国

(東京都墨田区 都営地下鉄「両国」駅・JR「両国」駅最寄り)

### 参加費

第1部：無料

第2部：運営協力金として2,000円(当日受付にて)

- 第1部のみ、第2部のみのご参加も可能です。
- さわやかパートナーをはじめとするご支援者の皆さまには、6月上旬に案内状(申込書)をお送りしております。
- 財団ホームページもあわせてご覧ください。
- 内容は変更になる場合がありますのでご了承ください。

お問合せ

電話 (03) 5470-7751

(全国交流フォーラム担当：中村)

メール [sw@sawayakazaidan.or.jp](mailto:sw@sawayakazaidan.or.jp)

## 皆さまのご参加をお待ちしています!

当日は、故堀田力前会長に関する展示も行う予定です

# とあ言おう

2025年7月号

## CONTENTS

### 2 新しいふれあい社会 実現への道

## 地域づくりは、時に引き算で

清水 肇子

### 4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

## いつもの助け合いを仕組みに変えて

おたがいさまの会 (埼玉県三芳町)

### 10 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

## みんなで子どもの“空き地”をつくろう

くすのきあそび場「あきち」(大阪府河内長野市)

### 18 シリーズ 定年、その先へ ー地域とのつながり方 ③

## 50～60歳代の会社員のキャリア意識とは

一般社団法人定年後研究所所長 池口 武志

### 新しいふれあい社会づくりに向けて

#### 14 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介/状況のご報告

#### 22 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー (賛助会員)・  
ご寄付者の皆様のご紹介

#### 24 活動日記 (抄)

㊦さわやか書棚

㊦「新・助け合い体験ゲーム」紹介

㊦さわやかパートナーのご案内/表紙絵から

助け合いを広げよう! 新・ひとりごと・西川 正

# 地域づくりは、時に引き算で

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

先日、「第34回日本老年学会総会」の合同シンポジウムで「住民・市民が主体的に参加する地域づくり」をテーマに話をさせてもらう機会があった。日本老年学会は7つの学会で構成されており、2年に一度、一堂に会してそれぞれの研究を披露し合う。今回は約8000人が参加予定と聞いており、3日間にわたって行われたプログラムは大変充実した、学び多いものだった。せっかくの貴重な機会であり、老年学をリードされている名だたる方々や地域づくりを研究されている方々などに、住民・市民の役割について個別に意見交換をさせていただいた。

改めて、「住民・市民参加の地域づくりはどのくらい必要でしょうか？」と尋ねてみる。改めて、「どのくらい」と加えたのは、必要かどうかを聞けば、必要ですと、ほぼ間違いなく答えが返ってくるはずで、その先、つまり、これからの社会の枠組みとしての本気の必要度を聞いてみたかったからだ。前夜祭も含めて20人ほどの方々と意見交換したが、それぞれ専門は違うが、皆さん「本当に必要で不可欠です」と強く賛同してくださり、大変力を得た。しかし、「でも、とつても難しいことですよ」と、これも総じて皆さんが語る。「日本全体で試行錯誤が続いているが、やり続けるしか道はないですね」と、言われた言葉が印象に残った。

住民・市民主体の地域づくりで一番難しいと言われるのは、住民のやらされ感をどう払拭す

ればよいか、というもの。当財団にもよく寄せられる質問である。

そこで一つの提案は、「引き算」のアプローチの活用だ。働きかけをみてみると、どうしても負担感を増すような「足し算」が多い。新しく何かを生み出す働きかけは重要だが、「これをお願いします」と言うだけでは、住民の負担意識は拭えない。誤った無理筋の足し算である一方で、だから新たなお願いはしない、旧来のあるものを有効活用しながら広げていく、という行政職もいたが、これも実は弊害が大きい。住民の可能性を信じずに、いずれ深刻化するであろう地域課題を放置しているだけで、先につながらない引き算だからだ。そもそも住民主体の地域づくりはお願いするのではなく一緒に考えるところが基本。何をやりたいのか、やれるのか、あれこれ積み上げ過ぎず、焦点を絞り、優先順位を考える。これが引き算である。

ただし注意が必要なのは、営利企業と違って成果がよくわからないから効率的に整理するという引き算は地域づくりには当てはまらない。住民参加はこれからの時代必要不可欠なものであり、アプローチとしての考え方に生かしてほしい。また「困りごとを考える」というのも一見足し算の負荷のように思うかもしれないが、そうではない。住民と共に「目指す地域像」を明確にし、何がこれから必要かにより具体的に集中していくことも、攻めの引き算である。それにより住民の参加意欲やいきがい、役割づくりを進めることができる。その上で足し算や掛け算の発想は新しいアイデアや活動につながる。多分野多世代が関わり合えるようにもなる。これらをうまく地域の実情と合わせながら考えてみてほしい。

ちなみに引き算の考え方は日々の暮らし方にもつながる。相手に望み過ぎない、気にし過ぎないように。住民活動でできないことが多過ぎるといってはあまりにストレスとなる。自分ができることに視点を変えることが、いきいきと暮らし、活動を継続させるコツといえるだろう。



# いつもの助け合いを 仕組みに変えて

おたがいさまの会（埼玉県三芳町）

地域で助け合い活動をしていても、それを仕組み化しようとする時、「活動時に何かあったらと思うと不安」と躊躇してしまう人も多いように思う。しかし、三芳町の「おたがいさまの会」は日常的な助け合いが当たり前に行われている中、あえて活動を仕組み化することにした。その理由を聞きたいと思い、同会を訪問した。

（取材・文／岡野 貴代）

## 相手の気遣いが気になって

三芳町は人口約3万7000人、埼玉県南部にあり東京にも近い土地柄。

「おたがいさまの会」のある上富地区

は人口約3000人、雑木林が広がる自然豊かな地域だ。しかし、住民の高齢化（高齢化率30・1%、2023年4月末現在）と公共交通の不足で、通院や買い物に困難を抱える住民が増え



2021年10月、おたがいさまの会設立総会での皆さん

ていた。

この日集まってくれたのは、おたがいさまの会代表の菅原法子さん（74歳）、会員の尾形サツさん（81歳）、鈴木義男さん（78歳）、前田厚子さん（69歳）、米山葉子さん（76歳）の5人。同会の

中心メンバーで、集まると地域の話題になる。もともと地域住民は昔からの顔なじみばかりという地縁の濃い地域でもあり、「ちょっとそこまで車で乗せてつて」と日常的に声をかけ合う助け合いはあったが、感謝の気持ちから「お礼」を渡す人が多く、相手に気を遣わせる状況を菅原さんは心苦しく思っていた。

そこで、菅原さんは19年夏頃、町社会福祉協議会に相談。町社協所属で生活支援体制整備事業の第1層生活支援コーディネーター（SC）である関口和宏さんとながった。20年2月には、第1層協議体で実施した移動支援の研究会に、おたがいさまの会立ち上げに

向けた「有志の会」から5人が参加。

謝金を介して頼む人も頼まれる人も気兼ねなく活動できる「有償ボランティア」という仕組みがあることを知ったことが、会立ち上げの重要なヒントになった。

その後、移動支援も含めた助け合い活動の団体を視察したいと、同じ埼玉県の川越市で活動する「ふじくらたすけあいの会」への視察研修を計画。コロナ禍で延期となったものの21年5月に実現し、「私たちにもできそうだ」とさらに前向きな気持ちになったという。6月からは有志の会で検討を重ね、21年10月には設立総会を開催しておたがいさまの会は発足の日を迎えた。

### 仲間を集めて活動開始 総会には利用会員も参加

仲間を集めるにあたっては、「この地域の人はほとんど知り合い」という菅原さんが声をかけ、集まった人が

さらに「あの人なら」と推薦する人も菅原さんが声をかけ、少しずつ協力会員が増えていった。菅原さんの夫も賛同者の一人で、立ち上げ時の費用を出して背中を押してくれた。

現在の会員は、利用会員42人、協力会員6人、両方会員3人。両方会員でもある尾形さんは、「協力会員として、お風呂掃除、草むしりをやっています。ここは交通が不便なので、通院は利用会員として支援してもらっています」。さらに「自分の所属している自治会は60歳以上の人がかり。自治会長をしているときに『これは何とかしなきゃ』と思っていたので、菅原さんの話を聞いてすぐに賛同しました」と振り返る。皆さんに実際の活動でのエピソードを聞いた。

「新規の利用会員さんから、電子レンジを冷蔵庫の上に置きたいという依頼を受けて支援した後、また電話があつて、孫に自転車の鍵をなくされてしま



おたがいさまの会による生活支援の様子

つたと。そこで、協力会員の軽トラで自転車を運んでいき、無事に鍵を開けてもらうことができました。こういうことは、おたがいさまの会がなかったら困っていたらと思うんです」「ペースメーカーをつけている方が半年に1回、点検で隣の市の病院に行くために利用されています。会の活動範囲は地域の集いの場『楽々』から5キロ以内を基本としていますが、その方は年金暮らしでタクシーを使うのは難しいし、病院まで1人で行くのも大変なので支援しています。担当している菅原さんにも『あなたは命

の恩人だ』とおっしゃっているそうです」「夫が働けず経済的に苦しいご夫婦が、夫の通院のために利用されました。この会がなかったら継続して通院するのは難しかったかもしれません」など、切実な地域の現状を聞くことができました。利用会員の反響はどうだろう。一人暮らしのFさん(87歳)は、同会設立当初からの利用会員で、毎週風呂掃除を依頼している。「足腰の痛みがひどく、今まで自分でできていたことにも限界が来たので、お風呂掃除をお願いしました。おかげ

さまでとても助かり、お風呂も気持ちよく入れていただけます。協力会員さんが昔からよく知っている方たちということもあって、安心なのもうれし



年1回開催している総会の様子。2022年には、視察先の川越市「ふじくらたすけあいの会」代表の大嶋照伸さんをゲストに迎えた(写真中央奥が大嶋さん)

い。お掃除が終わった後に一緒にいろいろな話ができるのも楽しみなんです」とコメントを寄せてくれた。また、同会では利用会員と協力会員の垣根なく皆で安心できる地域をつくりたいと、年1回、利用会員も参加する「総会」を開催している。総会では、利用会員も含め参加者全員から意見を

言ってもらおう。こうした場を設け、住民同士が十分に意見交換ができることも、助け合いを仕組み化した効果とと言えるだろう。

活動があれば自分も安心  
いつか当たり前に助け合うまちに

「〴〵やってあげている」という気持ちはないですね。情けは人のためならず。将来の我が身のこともあるし、〴〵せ

てもらっている」と思っています」と菅原さんは笑顔で語る。その言葉に皆さんも大きくうなずいていた。「業者より安くて便利」と捉えて利用を申し込む人もたまにいますが、ふれあい・助け合いの活動だということをしっかりと伝えて理解してもらおう。

尾形さんは、「できることをさせてもらおうと思っています。『頼める人（が）ほかにいないのよ』と言われるとお手伝いしたいと思いますし、こういう会があれば、自分が困ったときも

安心。だから協力会員としても手を上げました」

米山さんは、「通院の支援がほとんどで、この会の必要性をひしひしと感じています。〴〵おたがいさま。だから利用するほうも協力するほうも感謝できることが基本で、『ありがとう』と言われると、こちらこそありがたいと思います」と充実した表情だ。

前田さんは、「一人暮らしでおしゃべりを楽しみにしている利用会員さんが多いですね。それは依頼されたことではないかもしれないけれど、やっぱり『ありがとう』と言ってもらえるとやりがいを感じるし、この会に入ってから知り合いが増えたこともうれしく思っています」といきいきと語る。

鈴木さんは、「助け合いが必要だと思っても、『あったらいいよね』で終わってしまう地域もあると思います。でも、三芳町の他の地域にも『やるう』と立ち上がる人が必ずいるはず。



移動支援は協力会員がマイカーで行う

そういう人を応援して、自分たちのやり方も参考にしてもらいながら、次に続く活動が近隣地区でも立ち上がってほしい。そして、いずれは会として活動しなくても住民同士が当たり前に助け合えて、安心して暮らせるまちになればいいと思います。今後は、若い人たちが参加したいと思える環境づくりも必要ですね」と、今後に向けて話してくれました。

今回取材した皆さんは、小さな助け合いの積み重ねによってまわりも自分も幸せになっていくことがこの活動の魅力だと話していた。「誰かを支えることは、めぐりめぐって自分が支えられることにつながる」と口をそろえる。これから活動しようとしている人にメッセージをもらった。

菅原さんは「なかなか一朝一夕にはいかないで、日頃から地域に根差して、つながりをつくることが必要。負担にならない程度に活動することも大事ですね」と話す。

では、地域とつながるにはどうしたらいいのか。米山さんは「この活動をしていると、人への関心度が高まります。今日は隣の家の明かりがつくのが少し遅いけど大丈夫かな、と気にかけるようになる。それが、つながるといふことじゃないかと思います。自分が気かけると、相手も自分を気にかけるようになるですよ」

## 活動は住民さんのもの ～SCの立場から～

三芳町第1層SC・関口和宏さん

「おたがいさまの会」立ち上げでは、ちょうど第1層協議体で移動支援の研修会を企画していたことから、有志の会の皆さんにも呼びかけて参加していただきました。有償ボランティアという仕組みや、他地域の取り組みを知っていただく機会になったと思います。その後、活動団体の視察を希望されたため現場視察を企画し、コロナ禍を経て実施しました。

2021年6月には有志の会の皆さんによる月1回の話し合いが始まりましたが、最初に全体で共有したのは、どんな思いで支え合い活動に取り組みたいのかという「会の理念」でした。皆さんの共通認識ができた段階で、会則を作り、活動内容を決めていきました。移動支援ではマイカーを使用しますので、有事の対応について利用会員さんにどのように理解してもらうかを丁寧に話し合い、説明資料も作成しました。

SCとして伴走する中では、「この活動はあくまで住民の皆さんのものである」という視点を大切に、立ち上げ後は自主運営が進めていただくようにお話ししてきました。「他のどこかからやらされている」ということにならないように、住民の皆さん自身が考え、SCはどういう支援ができるかをあらかじめお伝えすることは大事だと感じます。

おたがいさまの会の方々からは、活動を仕組み化したことで、「困っている人がいる」と聞いたとき「助け合い活動の会がありますよ」と説明しやすくなった、利用者も分かりやすく安心して頼めるようだ、と聞いています。

今後も必要なことで後方支援し、町に助け合いの輪が広がっていくよう住民さんを応援していきます。

前田さんは「子どもが家を離れて、夫婦二人暮らし。安心して老後を迎えるためには助け合いが必要です。ぜひ『自分事』と思ってこういう会に参加してほしい」

鈴木さんは「健康なうちは自分が老いた将来について考えられない人も多いと思いますが、私はこの活動を通してそれを考えるようになり、人に対する想像力が豊かになりました」

皆さんの一言一言が身に染みました。

\* \* \*

鈴木さんの「自分の老後を想像してみよう」という問いかけに、あらためて年老いて一人で暮らす自分を想像してみた。遠くに住む子どもだけでは心許ない。近隣で気にかけてくれる人がある、何かを頼める人がいる、自分が活躍できる場がある。そのことがどれほどの安心感を生むことか。

私たちのまわりに、自然な助け合いはすでにあるのかもしれない。しかし



取材にご協力いただいた皆さん。  
右から時計回りに前田さん、尾形さん、米山さん、菅原さん、SCの関口さん、鈴木さん

それを仕組みとすることで、おたがいさまの会には「助けて」と声を上げられた人がいて、「命の恩人」と言うほど助けられた人もいた。それは日常の延長線にあり、仕組みとすることで特別な活動に変わるわけではない。「何かあったら不安」と思っても、まずはみんなで集まって検討してみても、どうだろうか。できる範囲の助け合い

なら、きつと誰にもできることはあり、どの地域にも必要。SCの支援も得ながら、地域の助け合いが進む方法を考えていきたい。

尾形さんの「自分の将来を考えたら、今できるうちにこういう活動をつくっておいたほうがいいのでは」との話が印象的だった。検討を先延ばしにするほど、時間はないのかもしれない。

### おたがいさまの会

有償ボランティアによる生活支援活動。掃除・草むしり・ごみ出し・通院や買い物などの車での移動支援（原則、地域の集いの場から半径5キロ以内）等、生活に関わるさまざまな支援を行う。謝金は10分200円。うち160円は協力会員に、40円は会の事務費。別途、年間1000円を協力会員に支払う。今年1～3月の活動件数は104件。

●連絡先 電話 049-258-0122  
(三芳町社会福祉協議会・関口)

／いきいき わくわく／

## 子どもと一緒に 地域で輝こう



# みんなで子どもの「空き地」をつくろう

くすのきあそび場「あきち」（大阪府河内長野市）

昭和の頃の地域には、子どもたちが遊ぶ空き地がありました。そんな楽しい「子どもの基地」をこの時代にもつくろうと、「楠小学校区つながる会」（以下、つながる会）が地域とタッグを組み、室内の「あきち」を昨年4月にオープン。高齢者も子育て世代も運営に参加しています。1周年を迎えたその取り組みを取材しました。

（取材・文／石橋 千春）



「あきち」の子どもたち。買い物ついでに寄る未就学児の親子などもある

ここは、つながる会が中心となって見守りボランティアにより運営されている子どものおそび場

「くすのきあそび場あきち」（以下、「あきち」）。年末年始・お盆以外は平日毎日15～18時、土日祝日も13～18時に無料で開放されている。開催場所は地元のスーパー「コノミヤ」の2階だ。1階は通常の売り場で、2階の空きスペースのうち1～20平米ほどが「あきち」だ。

まわりを囲むように本棚や玩具置き場が設置され、中央には玩具をいっぱいに広げて遊べる20畳ほどのカーペットが敷いてある。横には大きめの

木のテーブルと椅子もあり、そこで宿題やおしゃべりができるし、奥の壁は黒板になっていて、子どもたちが自由に落書きやお絵描きができる。

16時を過ぎる頃、学校帰りの小学生女子4人が一番乗りでやって来た。「こんにちは！」と見守りボランティアとあいさつを交わしながら受付で名前を記入する。その後も小学生が2人、3人と続き、テーブルを囲んでにぎやかにおしゃべりが始まった。中には、一人で来てカーペットの隅のほうに



玩具を出して黙々と遊んでいる子もいる。宿題をしている小学3年生の川口ふうまくんも「1人組」。週3回くらい来てるよ。家よりもこのほうが静かで落ち着く」とノートに向かう。1人でいても「独り」ではない。まわりに子どもたちや見守りの大人がいるから安心していられる。そんな和やかな気持ちがちちらにも伝わってくる。

## ● 子どもの課題に取り組むことが 他の課題解決にも

「あきち」のある河内長野市は人口約9万7000人、大阪市内から電車で約30分。その利便性に加えて自然にも恵まれ、ベッドタウンとして発展した。高齢化率は高いが、中学生以下の子どもがいるファミリー層も生活圏として選ぶまちになっている。しかし、子育て世代は共働きが多いから「放課後や休日に子どもが安心して遊べる場所がない」「自宅で過ごすことが多く、子ども同士のつながりがない」などの声があちこちから上がっていた。

「我々はその解決に向けて一歩が踏み出せていな

かった」と振り返るのは、つながる会会長で同市社会福祉協議会会長でもある玉崎和実さん（75歳）。つながる会は2013年に「地域の未来を考え、いざという時に助け合える地域の絆づくり」を目指して設立された。その活動の中で玉崎さんは、一番の課題である子どもの居場所を中心に取り組み、高齢者や他の課題解決にもつながるのではないかと考えるようになっていった。そんなとき、行政から子どもの居場所づくりに向けてつながる会に打診があり、それを耳にしたコノミヤの社長からも「それなら河内長野店の2階の空きスペースを活用してほしい」といううれしい申し出が重なった。

河内長野店の店长、高井智朗さんは「子どもの声が聞こえるのはいいですね。私も親の一人として、安心して子どもを託せる場の存在はありがたいです」と話す。

## ● 保育園つながりて子育て世代も参加

場所が確保できれば、あとは人集めだ。22年秋頃、玉崎さんはまず自治会長や個人有志に声をか

け、生活支援コーディネーター（SC）や行政も含めた運営委員会を発足させた。翌年6月には第1回会議を開催し、24年4月のオープンに向けて具体的な準備を進めた。その中で、玉崎さんの孫が通う保育園を通じた子育て世代とのつながりが功を奏した。親しくしていた林田亮一さん（47歳）と堀内真由美さん（45歳）に声をかけると、この取り組みに賛同。運営会議のメンバーとなり、設計士の林田さんは「あきち」の設計デザインを担当、地元で発酵教室を主宰する堀内さんは「地域通」なことから、イベント開催時などに連携が必要になる商店街との橋渡し役として活躍した。

もう一人、玉崎さんが頼りにしているのが田代佳祐さん（36歳）だ。田代さんは小学校の教師で、自身の子どもが通う保育園の園長からこのプロジェクトの話を聞いて参加した。「一人の親としても、学校や自宅とは違った環境で、子どもが安心して過ごせる場をつくりたいと思った」と田代さん。「それに今は、ゲームでさえオンラインです。ここに集まれば、直接顔を合わせて一緒に遊べますからね」

## ● 子どもによる子どものための場所

「あきち」の運営方針の大きな柱は「子どもによる子どものための居場所づくり」だ。例えば、「あきち」の名前を決める際は、運営会議で上げた3つの候補の中から子どもたちに投票で決めてもらった。また、イベントを開催するときも必ず「子ども会議」を開いて、内容について話し合う。大人はあくまで進

行役だ。「昨年の夏まつりのときも子どもたちが主体的に計画し準備して、運営もすべてやりました」と目を細める玉崎さん。子どもたちは、魚釣り、輪投げ、射的、くじ引きなどのブースを受け持ち、手作りの道具も用意して当日は店先に立った。「あきち」の中でのルールも最初は明確に決めなかったが、当然、小さ



子ども会議の様子。進行は田代さん（写真真中央）。イベントには地元の飲食店も出店し、地域住民200～300人が訪れる



オープン準備では子どもたちも黒板やテーブル作りに協力した

な問題がいろいろ起こる。「それも子どもたちが解決策を話し合いました」と田代さん。当初は子どもたちが走り回ったり、物を投げたりして周囲から苦情が来たそう。すると、子どもから「注意する看板を作ろう」とか「大きな字で書こう」とか意見が出て、それを掲示したら自然とみんなが守るようになっていったという。田代さんは「自分の子育て時期が終わっても活動を続けていきたい」と思っている。

## ● 全世代でやれば、活動も継続できる

現在、「あきち」運営メンバーとして登録している大人は26人(35〜77歳)。このうち、子育て世代は会議の運営等を主に担当し、普段の「あきち」での見守りはほとんどが高齢者で10人ほど。メンバーで元大学教授の早川滋雄さん(73歳)は「子どもと一緒に活動して、その成長を見守れることはとても楽しい」と話し、イベントなどでは手品を披露して子どもに大人気だ。「いろんな問題も出てきますが、みんなで話し合い解決していくことで、子どもたちも地域活動の意義を自然と

理解してくれるようになる」と考えている。目良香代子さん(77歳)は校区の主任児童委員として青少年の育成に力を注いできた。「私は銀行員でしたから、会計担当。ここにいるといろんな世代の人と交流できますし、私にとっても元気の源です」と笑顔だ。

今年5月末現在、「あきち」の子ども登録者数は乳幼児から高校生まで、小学生を中心に318人。利用は1日平均13人、多いときは60人くらいが来る。「当初は子どもが来てくれるか不安でしたが、1年が過ぎて『あきち』の存在が地域に定着しました」と玉崎さん。

現役時代から土日に見守りを引き受けてきたメンバーが、退職後、本格的に参加してくれるという新しい風も吹いている。全世代が一緒になって取り組むことにより、活動も継続されていくのではないだろうか。



前列左から、早川さん、玉崎さん、目良さん。  
後列左はSC浜本みなみさん、右はサポートメンバーの道端俊彦さん

# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、外国人女性支援、高齢者への弁当配布、子どもたちのプレーパークを紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

東京都府中市

### 孤立しがちな外国人女性を支援

一般社団法人ROWJ外国人女性支援協会

助成金額 15万円

府中市内およびその近郊に居住する外国人女性を支援するために「一般社団法人ROWJ外国人女性支援協会」は2019年に発足しました。支援内容は、住民登録や健康

保険の加入、子どもの保育園申請など役所に提出する書類の準備や手続きの説明、医療機関で通訳として診察や治療についての情報を正確に伝える、銀行口座の開設や住宅の契約などです。また、学校



居場所で交流する外国人女性たち

の保護者会の通訳など、外国人女性が日本での生活をスムーズに送れるよう活動しています。

本国では手芸などの楽しみを持っていた女性でも、国を追われて何もできなくなりストレスから体調を崩したり、地域の人々との関わりが少なく孤立しがちです。そこで、今回の助成金はイベント型居場所を9回開催し、そのための会場費や講師の謝礼金、手芸

や工作の材料費などに活用されました。宗教上の理由から家族が許可した場所にしか出かけられない外国人女性のために、同協会の支援員が家族宛に手紙を書くなどの工夫も行ってイベントを実施。料理や手芸、季節の飾り作りや日本文化に触れる会などを開催し、楽しい交流の時間を持つことができたそうです。今後も、地域から孤立してしまつ外国人女性のために居場所づくりを続けていきたい、と報告をいただきました。



青空によるお弁当配布の様子

## お弁当配布から広がる 地域のふれ合い・助け合い

福井県敦賀市

一般社団法人青空

助成金額 10万円

「一般社団法人青空」は2022年に発足し、子ども食堂、学習支援等の活動を行っています。また、地域のつながりづくりの一環として月2回、敦賀市津内町1丁目の一人暮らし高齢者へのお弁当配布を、区長、民生委員、壮年会と一緒にを行っています。生協に1食400円で作ってもらつたお弁当を300円で販売、1食100円を青空が負担しますが、今回の助成金はこの100円の負担金1年分に活用されました。

お弁当配布を始めてから、体の様子がおかしいと利用者から連絡をもらい、民生委員につないで救急車をスムーズに呼

ぶことができたということもありました。その人は脳梗塞でしたが対応が早かったため、現在は元気になり、お弁当配布を手伝っているそうです。なぜ青空に電話したのかたずねてみたところ、普段電話をかける機会がなく、お弁当注文の履歴でかけたとのこと。

お弁当配布は、その場で出会った人同士が立ち話をしたり、民生委員や区長らの声かけで楽しそうにしている様子も見られます。また、この活動をきっかけに、壮年会が一人暮らし高齢者を対象とするごみ捨てや植木の剪定等のボランティアを始めました。住民同士のつながりが希薄になっっている中で、今後も続けていく必要性を感じています、と報告をいただきました。

兵庫県六粟市

## 子どもの自発性を伸ばす わくわくプレーパーク

遊名人

助成金額 12万4000円

「遊名人」は、2017年から代表者の自宅を開放して放



補修したトランポリンで遊ぶ子どもたち

課後子ども教室を運営。地元の大学の体験実習として学生を受け入れるなどの相互協力も行っています。自宅が手狭になったため、途中からは廃園になった近くの幼稚園を市から借り受け、22年4月から申し込みなしで参加できるプレーパークも開始。子どもをメインとしながらも学生や大人のための居場所も提供しています。市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターも、以前からこの活動について相談に乗り、地域への周知等にも協力しています。

活動を通して多くの人が自然に集い、これまで顔見知り程度だった人同士が気軽に声をかけ合い、子どもたちが笑

## 「地域助け合い基金」 状況のご報告

活動の立ち上げに必要な資金にも「地域助け合い基金」が役立っています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

(6月15日 当財団ホームページ開示時点)

### ◎寄付受付額

430件 2億906万7637円

このうち遺贈基金より1億7000万円を供出

### ◎助成実行額

1305件 1億988万8139円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード  
決済ページ



財団ホームページ内  
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

### 基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金  
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

顔で遊び、大人たちは気づきを共有する場となっていてのこと。人と人とのつながりが持つ力を再認識し、着実に広がっていることを実感しているそうです。

今、子どもたちの遊びはさまざまなが「危ない」と禁止され、昔に比べると経験不足の子どもが多いことから、プレーパークでは大人の見守りの中、火起こし体験やのこ

ぎりを使った製作を行っています。

今回の助成金は、子どもたちに人気のトランポリンの傷みが激しかったことから、その補修に活用していただきました。

今後に向け、地域食堂なども計画しているということです。

定年、  
その先へ

地域とのつながり方

3

一般社団法人定年後研究所所長

池口 武志

50と60歳代の会社員の  
キャリア意識とはここに一つの数字があります。「87・4%」<sup>\*</sup>

この数字は60歳定年制の会社で、60歳以降同じ会社で継続勤務（再雇用）を選択した社員の割合です。

※令和5年「高齢者雇用状況等報告」（厚生労働省）

40年前後汗水たらして仕事を続け、ようやく60歳定年の節目を迎え、退職金も受給できる中で、9割弱の社員は、65歳までを視野に、同じ会社での継続勤務を選択します。読者の皆様はこの数値を高いと思われませんか？ あるいは低いと思われませんか？ 高齢社員の雇用上の課題を企業に尋ねると、大半

の調査結果では「高齢社員のモチベーションが低い」が常に第1位となっています。世界中の調査では、人の幸福感は50歳前後を底に上昇することが確認されている中で、とても残念なことです。年功序列で昇進昇給を重ねる伝統的な日本の人事制度のもと、多くのベテラン社員を待ち受けるのは50歳代半ばでの役職定年（役職者から一人のプレーヤーに戻る人事慣行）や、60歳定年後の再雇用社員への変更に伴う職務範囲の縮小です。責任と権限の縮小に伴い平均値では、賃金が23%減額をきたします。

（いげうち たけし）1986年日本生命に入社。本部・現場で長く管理職を務め、多様な人材育成に関わる。2021年定年後研究所所長就任後は、シニア就労促進に関する企業取組、シニアの意識調査に従事。還暦で桜美林大学院老年学修士課程を修了。厚生労働省生涯現役社会の実現に向けた検討会委員、企業から福祉への人材供給に関する調査研究事業検討委員、早稲田大学キャリア・リカレント・カレッジ講師、シニア社会学会理事等を通じて、シニアの可能性の拡がりを志向。

先の「87・4%」という再雇用選択率ですが、本人が主体的に選択した結果であれば、その後の仕事に向き合う姿勢やモチベーションも問題視されにくいと思いますが、他にキャリアの選択肢が思いつかず、周囲に流されての「消去法での選択」であれば、責任と賃金が縮小する中で、モチベーションも下降曲線を辿ることは想像に難くないでしょう。

年齢を尺度とした日本企業の人事慣行に課題があるのは否めませんが、一方で働く側の意識にも大きな問題があることが、多くの調査研究で明らかにされています。それは「会社主導の（＝受け身の）キャリア形成を重ねてきた会社員は、いざ自分でキャリアを選ぶ局面（選べる立場）に立っても、主体的に選べない」という問題で、専門用語では「キャリア・オーナーシップ（自分のキャリアに積極的に関わり、責任を持つ心構え）」の欠如と表されます。

筆者も、10回超の社命による転勤を（多少の不満はあっても、ぐっと飲みこんで）受け容れ、5月号タイトルの「会社と社宅を往復するだけの人生」に

疑問を持たず、60歳の節目を2年前に迎えた典型的な会社員でした。

自分がやりたいことは何なのか？ もっと会社や社会に貢献できることはないのか？ 培ってきた経験や能力を活かせる新たな活躍の舞台はないのか？

60歳以降も続く人生100年時代において、定年という人生の踊り場で、自らを活かす場所、キャリアの進路を探索する作業をどれほどの会社員がしているのか？

「定年の後に続くサードエイジは人生最良のとき。ただし、自らの意識と行動で実現を図るべし」と説いたのはイギリスの歴史人口学者のピーター・ラスレットです。「定年前後でキャリアチェンジ」を果たした少数派へのインタビューで筆者が聴いたのは、キャリアの主体的な選択がその後のイキイキ人生を生み出す起点になった物語でした。転勤族の大企業から地域社会に飛び込んだ方々がまぶしく感じました。次号で詳しくご紹介します。



# 歌集 漂老

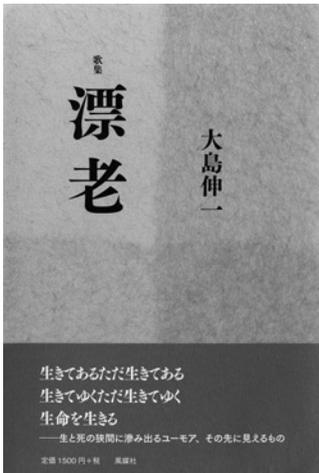
大島 伸一（著）

80歳になる著者が短歌を作り始めたのは68歳頃からだという。中学生で石川啄木に惹かれ、その後もさまざまな歌人の短歌集が身近にあった。78歳で大病をし、死を初めて意識したことが、作品を本としてまとめる何かしらの動機となったと語る。

（本書より）

綱渡りのやうな人生だつたなあ何度落ちると思つたことか  
いくつまで生きてゆくのかいくつまで生きてゆけるか妻の顔見る  
豊かさはモノではない支へあふ日々の生活<sup>たつき</sup>の在り方をいふ  
罪のなき一人を殺せば人殺し百人殺して英雄となる  
花めでの気持ちに老いの索漠<sup>さくぼく</sup>が空の青さに見とれる晩夏

（公財）長寿科学振興財団の理事長でもある著者は、医師として卓越した実績を残し、その後日本の国立高度専門医療センターの一つである国立長寿医療センター<sup>\*</sup>の初代総長に就任。以来、長寿医療のあるべき姿を強力にリードしてきたパイオニアでもある。その著者が老いや死と向き合い揺れ動く心情を包み隠さずに吐露し、時に現代社会のありように深く切り込む474首をまとめた歌集である。大学における研究偏重、科学至上主義の弊害を鋭く指摘し、治す医療から人の生活を支える医療への一大転換を訴え、“長寿を喜べる社会に”と、今なお向かう道を歩み続けている。著者の素の心が静かに読む者の気持ちに染み入ってくる一冊である。



風媒社

1,650円（税込）

# 新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、  
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、  
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる  
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・  
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記（抄）**





公益財団法人住友生命健康財団  
ハート公所つきみ野  
株式会社プロテリアル

一般ご寄付（1件）

支え合いひまわり基金（匿名・50万円）

# みんなで 新しいふれあい社会を 作りませんか



# さわやか活動日記(抄)

column

## 能登半島地震の被災地を視察

■輪島市(石川県)

共生社会推進担当(東京都教育委員会研修生) 雛形 亮我

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター



昨年元日の能登半島地震と同年9月の能登半島豪雨の影響がまだまだ色濃く残る輪島市。同市で活動するさわやかインストラクター中村悦子さんから、当財団の鶴山に「そろそろ居場所勉強会がしたい」、そして「現状を見ていただくとうれしいです」と連絡があり、5月27・28日の2日間、現地の情報収集と同市河井町にある「一般社団法人みんなの健康サロン海風」(代

表・中村さん)が運営する「みんなの保健室わじま」等の視察に私も同行させてもらった。  
みんなの保健室は、入口の扉が常に開かれ中の様子が外からよく見えて、オープンな居場所との印象を持った。仮設住宅に住む方や近隣の方々が訪れ、コーヒを飲みながらおしゃべりして、帰りに50円か100円を機の貯金箱に入れ、誰でも気軽に立ち寄れる心地

良い場所だった。集まる住民からは、「仮設住宅にいると近所との付き合いもなく、声をかけるきっかけもないが、ここに来れば誰かと楽しく過ごすことができる」「行くところがあるのがいい」との声。中村さんも「異業種の方もたくさん集まり、情報交換できる良いコミュニティになっている」と話していた。夕方になると、以前地元で塾を経営していた方がその場所を

使って中学生を対象に塾を開き、10名ほどが学校帰りに寄って学習していた。  
輪島朝市の跡地をはじめ、市内の門前町や町野町を車で回っていただき、復興状況についても見学した。地震から約1年半、豪雨から半年以上経つ現在も、インフラ整備にはまだまだ時間がかかりそうな状況で、発災直後のような手つかずの



「みんなの保健室わじま」1階の居場所



保健室2階には打ち合わせスペースも  
(写真中央は中村さん、左側は財団の鶴山、雛形)

現場も数多く残っていた。同市社会福祉協議会にも立ち寄り、殿田恵子事務局長に話をうかがうことができた。現在、被災者の皆さんは避難所から仮設住宅への入居が落ち着いて、徐々に住居を建て替える動きがあり、公営住宅への情報も

出され始めているとのこと。仮設住宅でのつながりづくりの必要性や、今後、生活の拠点が変わることによる新たなコミュニティづくりや居場所・サロンづくり、社会資源を使った地元食材の販売等、さまざまな課題について情報を共有できた。

住民の行きたい場所があったり、住民同士が気軽に話せる環境があったりすること、そして居場所の重要性を理解した。また、その中心でさまざまな働きかけをする中村さんが地域住民の心の支えとなっていることにあらためて気づかされる2日間だった。

被災地の状況がテレビなどで取り上げられる機会も減る中、インフラ整備も居場所づくりも順調なように見えていたが、住民の中には、病院にかから

ず気づいたときには手遅れになるケースも多々あるという。医療・福祉の専門職の人材確保やその環境整備などが震災前の状態に戻るまでには何年もかかり、今も深刻な課題がたくさん残っている。

鶴山からは「今後は居場所づくり勉強会の開催について、中村さんや市社協とも情報交換しながら進めていきたい」と聞いている。教育の現場を離れて初めての現地視察だったが、この経験を生かして、財団の推進する「いきがいをもって、ふれあい、助け合い、共生する地域社会」の実現に向けた取り組みに、地域課題や何を優先すべきかを整理し柔軟に対応していきたい。

# 新しい「高齢社会対策大綱」から再認識したこと

## 社会参加推進事業担当として、高連協事務局として

社会参加推進リーダー 玉置 英明

昨年9月、6年ぶりに改定された「高齢社会対策大綱」が内閣府から発表された。私が事務局を務める高齢社会NGO連携協議会（高連協）では、今年2月に開催した「創立25周年記念の集い」に合わせ、2024年度政策提言事業として、新しい大綱に基づいたアンケートを実施。高連協会員団体それぞれの活動や課題を「集い」の場で発表、共有した。

大綱は、人々が「年齢によって分け隔てられることなく、若年世代から高齢世代までの全ての人々が、それ

ぞれの状況に応じて『支える側』にも『支えられる側』にもなれる社会を目指し、全世代の人々が『超高齢社会』を構成する一員として、希望が持てる未来を切り開いていくことが必要」とうたっている。基本的考え方の柱は、(1)年齢に関わりなく希望に応じて活躍し続けられる経済社会の構築 (2)一人暮らしの高齢者の増加等の環境変化に適切に対応し、多世代が共に安心して暮らせる社会の構築 (3)加齢に伴う身体機能・認知機能の変化に対応したきめ細かな施策展開・社会システム

の構築、の3つである。当財団をこれに当てはめるとき、3つの柱すべてに関連する事業を展開してきたことを再認識した。

(1)については高連協を主体に取り組み、当財団の直接事業としては、企業退職者やシニア層、勤労者や学生らの地域社会への参加を推進するための調査研究、地域の子育て・子育てを支援する仕組みづくりに向けた活動等を展開してきた。具体的には、①現役勤労者と地域社会をつなぐ研究、②シニアの社会参加と子育て支援の研究、③ボランティア活動報告書の手引き・提言、④企業担当者へ社会貢献活動参加の意義や効果を講演等と呼びかけ・パレルキャリアの提案、スポーツを通じた世代間交流「さわやかスポーツ広場」、などが挙げられる。

(2)は、①全国の住民主体の地域づくり推進、②心豊かな共生社会づくりに向けた「いきがい・助け合いサミット／オンラインフェスタ」による提言、③独自ツール・資料による働きかけ（「新・助け合い体験ゲーム」「居場所ガイドブック」「みんなでやってみよう！訪問助け合い活動」などの展開）、④「地域助け合い基金」による住民主体の助け合い活動の支援などが該

当する。(3)も趣旨を踏まえて実施・展開している。

高連協の本年度政策提言事業で、当財団の清水肇子理事長も高連協共同代表として登壇した6月の「第34回日本老年学会総会」にお

ける合同シンポジウム「エイジフレンドリーな地域共生社会に向けて」では、超高齢社会の姿として年齢にかかわらず誰もが自分を生かして幸せになる社会を目指そうと、高齢社会対策

大綱を踏まえて提言。地域の役割と住民・市民が参加する活動や世代を超えた地域交流等の発表を踏まえ、未来に向けてすべきことについても登壇者が議論した。本年度以降も社会参加推

進事業担当として、また、高連協事務局として高齢社会対策大綱の基本的考え方を念頭に活動していきたい。

各地・各事業の取り組みをご紹介します

### ふれあい推進事業

## 生活支援体制整備事業 新任メンバー向け研修会に協力

### ■羽咋市（石川県）

【5月12日】羽咋市で、市担当課と第1層・第2層SC（市社協）を対象とした地域支援事業の研修会がオンラインで開催され、当財団は講師として協力した。

本研修会は、今年度の異動やSCの交代等を受けて企画された。

講義内容は主に、生活支援体制整備事業の概要と背景、住民主体の考え方、住

民主主体の活動を進めていくための具体的な取り組みなど。特に「なぜ住民主体なのか」「これまでのやり方から発想を変える」といったことを強調して伝え、質疑応答を行った。

同市では、これまで各地区で住民勉強会を開催し、住民中心で構成した第2層協議体を立ち上げてきているが、現在、活動状況に差が出ているため、その要因

と対応案なども説明した。さらに「第1層協議体をどう活性化させていくか」についても触れた。

「協議体での話し合いがまとまらない」との質問では、「意見はいろいろあるもの。否定せず対話を重視する」ことを共有した。連携を強化した今後の取り組み推進が期待される。（高橋 望）

## ■ ささえ合い座談会と第1層協議体に協力

### ■ 紀北町（三重県）

〔5月14・15日〕紀北町は三重県南部に位置し、急峻な山々に囲まれた人口約1・4万人の自治体である。この中の人口440人・250世帯で構成される三浦地区で、5月14日に住民同士で暮らし続けていける地区を考える「ささえ合い座談会 in 三浦」が開催され、当財団も協力した。

この座談会は全3回の予定で今回が2回目。同町では住民の地域活動への参加推進を目的に開催された「ささえ合い講座」をきっかけに、地域の将来を考える「みらい塾」が立ち上がっており、住民同士の話し

合いが継続されている。みらい塾は町全体を対象としているが、今回、同地区の住民から「地域でのささえ合いの大切さを共有し、自分たちができることを考えてみたい」との声が上がり、座談会が企画された。

1回目では「三浦地区の今と20年後のこれから」のイメージを共有した上で、「三浦地区のいいところ・困っているきょうなこと」について話し合っており、す

でにあるものと困っていることが共有された。2回目の今回は「困り事も皆で考えてみると対応できることも多い」ことに気づいても

らい、次回3回目の「なったらいいと思う三浦地区になるためにできそうなことを考える」につなげていくことを目的とし、「助け合い体験ゲーム」も取り入れた。

参加者は約20人で、学校帰りの小学生2人も母親と一緒に参加してくれた。

体験ゲームに参加した小学生からは「みんなが優しくして楽しかった」「自分も相手に優しくできた」との発表があり、周囲の大人たちの顔がほころん



紀北町「ささえ合い座談会 in 三浦」での助け合い体験ゲームの様子

でいた。また「ちよつとした困り事なら誰かが助けてくれる」「ボランティアは自分を幸せにしてくれる」「一人ならようせんけど一

緒にならできる」といった声も上がっていた。

財団からは「困り事に気づくことが第一歩。それを自分事として考えることから、助け合いづくりが広がっていく」ことを伝えた。同地区の座談会は終了後も話し合える場を継続し、皆でできることを考えながら行動していくことが計画されている。

翌15日には第一層協議体が開催された。協議体は紀北広域連合・地域包括ケア推進係もメンバーとなっており、さらに今年度1回目ということもあり行政担当課長と町社協の事務局長も参加した。今回は新任メンバーも数名いることから、財団から地域支援事業と協

議体・SCの役割について説明した。第一層協議体として今後具体的に取り組むことを協議し、できること



### 情報・調査事業

## ソウル大学校

## 「国際移住と包摂社会センター」来訪 「ふれあい切符」等を財団から紹介

〔5月13日〕韓国・ソウル

大学校傘下の「国際移住と包摂社会センター（CTMS）」から、センター長のウン・ギス氏をはじめ主任研究員や研究員、通訳の方など7名が「『ふれあい切符』について教えてほしい」と当財団に来訪した。「韓国においても介護保険制度が運用されているが、制度

から実践するということも共有した。これからのさらなる一歩に注目していきたい。（高橋 望）

がカバーしきれない多様なケアの空白領域が存在している。このような背景から、地域住民が主体的に関わりつながり合うシステムを地域と共に企画している」と趣旨説明があった。

ふれあい切符（時間預託制度の愛称）は、財団が設立当初に研究会を立ち上げ推進した助け合いの仕組み。

CTMSの皆さんが関心を持ったのは「住民が自発的に参加する地域社会ケア体制を築くにあたり、いかにして相互ケアを促進し、持続可能にしていくか」という点である。

最初に清水肇子理事長が財団の理念や主な事業について説明。その後、鶴山から、①ふれあい切符制度の現状、②事例紹介（NPO法人ふれあい天童、NPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ）、③住民主体の助け合いある地域づくりの推進として、さわやかインストラクターや生活支援コーディネーターを核とした自治体と連携した働きかけ等、④さまざまな助け合いの仕組みとして、有



当財団に来訪したソウル大学校「国際移住と包摂社会センター」の皆さん  
(左は当財団の清水理事長、その右は鶴山)

償ボランティア、共生型居場所、近隣助け合いなど住民主体の助け合いの仕組みや立ち上げのノウハウ、事例を紹介した。

皆さん熱心に説明に聞き入り、例えば「さわやか福祉財団と市区町村との協力関係は」「中間支援団体は地域の取り組みにどこまで関わっているのか」など、たくさん質問を下さった。特に事例や償ボランティアの仕

組みについての具体的な質問が多く、その熱意にこちらも応える時間となった。住民任せではなく住民が心を動かし、仲間と話し合いを重ね自己決定しながら立ち上げ、「お互いさま」

### 社会参加推進事業

## 高齢社会NGO連携協議会 2025年度第1回役員会開催

〔5月27日〕2025年度第1回高齢社会NGO連携協議会（高連協）役員会を、当財団会議室で開催した。一般社団法人日本老年医学会名誉会員・元理事長の大会内尉義氏、清水肇子当財団理事長の両共同代表、理事8名、幹事2名、計12名が参加した。

で継続してきた活動。韓国でも「住民主体によるつながり合うシステムづくり」が動き出していることに注目していきたい。

（鶴山 芳子）

主な議題は、6月17日開催予定の2025年度第1回総会に向けて、(1)2024年度事業報告に関する件、(2)2024年度決算報告に関する件、(3)2025年度第1回総会議長及び議事録署名人に関する件。

(1)・(2)については事務局から資料に基づいて説明し、

(2)については監事より監査報告が行われ、いずれも承認された。(3)は、第1回総会議長として黒水恒男理事、議事録署名人として岡本憲之理事を総会で諮ることとした。

その他連絡事項として、6月27日に幕張メッセ(千葉市)で開催される日本老

年学会総会と共催する合同シンポジウム「エイジフレンドリーな地域共生社会に向けて」の集客状況を確認した。合同シンポジウムに当財団の関係者も含め広く参加を募り、社会参加推進事業につなげたい。

(玉置 英明)

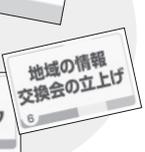
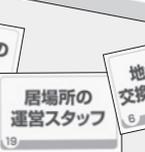
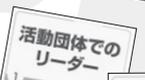
### 事務所 だより

●今年度も、高校生が就業体験に来てくれる季節となった。大人ばかりの慣れない環境でさぞ疲れることだろうと毎回思うが、どの生徒さんも職員がお願いした作業を実に真剣に行ってくれる。そういう姿勢に、職員もあらためて刺激を受けて日々取り組んでいる。



## 新・助け合い体験ゲーム

地域の助け合い活動におけるニーズと担い手発掘を体験できるゲームです。助け合いをつくる関係者の研修や住民勉強会等で、効果的に活用していただけます。



◆1,100円 (消費税込、送料別途)

【お問い合わせ・お申し込み】

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人  
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人  
年会費  
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を  
いただく場合の  
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

\*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。  
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵に はり絵・池田げんえい



「花祭」

編集後記 ●「活動の現場から」は埼玉県三芳町。ご近所の助け合いを“仕組み”にしたことで、さらに活動が広がりました(P4~)。●「子どもと一緒に地域で輝こう」は大阪府河内長野市の校区にできた居場所です。多世代が主体性を持って活動に参加しています(P10~)。

【お詫びと訂正】

6月号「広げよう つなげよう 地域助け合い活動の現場から」において、誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。16ページ最後の連絡先電話番号の市外局番は「259」ではなく、正しくは「0259」です。

助け合いを  
広げよう!



西川 正

「ねえ、きいて うれしいこと  
ねえ、きいて かなしいこと  
わたしの すきな ばしょ」

P T A の役員をしている時に出会った、  
小学校 1 年生の子の三行詩です。

いい悪いという評価を脇において、  
ただただ「なあに」と耳を傾けてくれる、  
自分の声に「応え」てくれる。

子どもたちが望んでいるのは、  
そんな「誰か」なのではないでしょうか。  
そして、大人もまた同じ。

応えは、安心を生み、  
安心は「やってみよう」を生みます。

●特定非営利活動法人ハンズオン埼玉副代表理事/  
真庭市立中央図書館館長

『ヤキイモタイムキャンペーン』『トークフォーク  
ダンス』など地域の人々が出会うためのさまざまな  
仕掛けを実践、提案してきました。著書に『あそび  
の生まれる時「お客様」時代の地域活動コーディネ  
ーション』（2023年、ころから）など



## 7月号

通巻383号 2025年7月10日発行  
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい  
編集担当 塩瀬潔泉  
取材協力 七七舎  
レイアウト 菊池ゆかり  
印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子  
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団  
〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階  
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp  
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>  
Printed in Japan



# いきがい・助け合い オンラインフェスタ 2025

2025年

10月14日(火)～10月23日(木)開催

今年も「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」を開催します。

生活支援コーディネーターや協議体、自治体の皆さんをはじめ、全国で住民主体の地域づくりに取り組んでいる方々の参考としていただける事例や考え方、課題への対応を発信いたします。

学び合いの機会として、ぜひご参加ください。

**皆さまのお申し込みをお待ちしています!**

**開催方法：完全オンライン配信方式** (アーカイブ配信あり)

**プログラム：オープニングフォーラム、特別トーク**  
個別テーマによる「学ぼう編」「語ろう編」他

**申込受付：2025年8月中旬**より (予定)

**参加費：1,000円(税込)** 後日、ダイジェスト版を希望者に郵送  
参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、  
地域活動を応援します。

## 主な個別テーマ

### <学ぼう編>

- ◆ 地縁組織との連携、近隣助け合い
- ◆ 助け合い創出のアプローチ手法
- ◆ 子どもの育ちの地域支援
- ◆ 企業との連携
- ◆ 過疎地(小規模自治体)の助け合い
- ◆ 共生型常設型居場所
- ◆ 認知症の人と共に生きる地域づくり
- ◆ シニアの社会参加

### <語ろう編>

- ◆ SCと協議体の取り組み
- ◆ 助け合いの社会的価値とつながり方
- ◆ 有償ボランティアによる生活支援

\*プログラムは現段階での予定です。

\*プログラム、お申し込み方法の詳細は、決定次第、当財団のホームページや本誌等でお知らせします。